

# 東日本支部だより

2005年11月10日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

## 12 月定例研究会のお知らせ

### ◆東日本支部第 22 回定例研究会

時 2005 年 12 月 3 日 (土) 午後 1 時 30 分～4 時 30 分

所 お茶の水女子大学

人間文化研究科棟 4 階 405 講義室

\* 地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅下車 徒歩 7 分

\* ご来校の際は、身分証明書をお持ちの上、正門をご利用ください。

\* いつも使用している建物・教室ではありませんのでご注意ください。暖房設備が不十分な場合がありますので、暖かい服装でお越しください。

### ○研究発表と対談「アジアの芸能とジェンダー」

#### 1. インドの芸能における民主化とジェンダー:

デーヴァダーシー問題とナーガラトナンマールの貢献

井上貴子(大東文化大学)

#### 2. 女流義太夫の「正統化」とジェンダー:

日本の近代化と伝統芸能保護政策の間で

中村美亜(東京芸術大学)

#### 3. 対談:アジアの芸能とジェンダー

井上貴子×中村美亜

司会 塚田健一(広島市立大学)

## 定例研究会の予定

### ◆東日本支部第 23 回定例研究会

2006 年 2 月 4 日 (土) (発表希望締切 11 月末日)

### ◆東日本支部第 24 回定例研究会

2006 年 3 月 18 日 (土) (卒修論発表 その 1)

### ◆東日本支部第 25 回定例研究会

2006 年 4 月 1 日 (土) (卒修論発表 その 2)

### ◆東日本支部第 26 回定例研究会

2006 年 6 月 3 日 (土) (発表希望締切 2 月末日)

### ◆東日本支部第 27 回定例研究会

2006 年 7 月 1 日 (土) (発表希望締切 3 月末日)

## 定例研究会発表募集

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため定例研究会での研究発表等を募集しております。発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800 字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、それぞれの締切期日までに東日本支部事務局までお申し込みください。

## 定例研究会の報告

### ◆東日本支部第20回定例研究会

時 2005年6月11日(土)午後1時30分～4時30分

所 お茶の水女子大学 共通講義棟1号館304教室

### ●研究発表

#### 1. ラウネッダス舞踊における音楽と舞踊の相関関係

金光真理子(東京芸術大学)

(発表要旨)

本発表ではイタリアのサルデーニャ島のラウネッダスによる舞踊音楽を従来看過されてきた舞踊の観点から考察し、音楽と舞踊の相関的な構造を明らかにする。ラウネッダスの舞踊曲は演奏のアウトラインともいべき「イスカラ」(階段)に従って演奏される。イスカラは「ノード」という単位に下位区分され、各ノードではさまざまなフレーズ(十二拍ないし十八拍の定型の拍節)が即興的に展開される。

ミクロな視点からみると、一つひとつのノードには特徴的なエレメント(一拍)とそれをフレーズへ組み立て展開するシンメトリックなパターンがある。踊り手はこのようなフレーズの構成素材・原理を経験的に学んでいるため、ノードを具体的に聞き分け、ノードの推移に従ってステップを変えることができる(「音楽にあわせて踊る」)。また、マクロな視点からみると、イスカラは舞踊の山場である「フーリアス」と「パッサ・プンタウ」を挟んでノードを(始め)から(終わり)までならべたものとみることが可能であり、イスカラは舞踊のプロットでもあることが判る。

イスカラはパフォーマンスを方向づける規範的な枠組みであると同時にパフォーマンスのダイナミズムを保障する柔軟な枠組みでもある。イスカラは一つのノードにつき演奏するフレーズを可変的に展開し、演奏を長くも短くもすることができるという点で(伸縮自在な枠組み)である。また、踊り手とラウネッダス奏者はパフォーマンスにおいて相関的な関係にあり、両者の結節点にイスカラをみることができる。

ラウネッダスの舞踊曲のイスカラの考察を通して明らかになるのは、音楽と舞踊の相関的な関係に鑑みてその構造を分析することの重要性である。さらに舞踊を社会的・文化的に考察し、音楽と人々の身体表現との関わりを分析するならば、音楽がいかに社会・文化の網の目の中に織り込まれているかを理解し、ひいては音楽を通して社会・文化を理解することへもつながるに違いない。

#### 2. 音楽と舞踊の記譜からのダンス・イディオムの抽出

—金刀比羅宮の巫女舞の事例から—

木村はるみ(山梨大学)

研究協力 伊藤江理(雅楽演奏家)

(発表要旨)

舞踊は、時・空間芸術といわれ、その要素は、空間的なものと時間的なものが融合されている。われわれが、舞踊を観察する場合あるいは習得をしている際に、まず、共時的な空間情報として、身体の形と運動が目に入るが、もう少し、細かくみると、身体のどの部分がどのように、動いているのかが見える。しかし、その良く見える運動

情報にとって、正確になるには、それが、「いつ」行われているのか、という通時的な情報が必要である。そしてこの「いつ」の分節単位をその舞にふさわしく考察したい場合、言語的分節でもなく、またメカニカルな測定的時間の尺度でもなく、音楽的時間の分節が有効であると思われた。さらに祭典の行われる時間には、自然界の時間や人間の人生における時期、演奏者の内的な時間など、さまざまな「いつ」が重層的に一音、一動作を決定していると思われた。

研究はまだ、途中であるが、今回、動作単元の抽出を目的として、春日大社から金刀比羅宮へ明治初期に伝承された巫女舞のひとつ「宮人」の記譜を試みた。Your Move と言われる記譜システムで動きの概要を記述する Motif Description と言われる方法である。その記譜の作業の中で、ビデオによる身体的動きの特徴(空間情報)は目により把握され、記号を選出できたが、その記号の長さや変化を決定する際に、五線譜による採譜を参考とした。シャク拍子、銅拍子(横と縦の2種類)、琴、笛、歌に合わせて舞われるこの舞の動作は、ゆっくりとただ流れていくだけにみえていたが、いくらか動作に単元と考えられるものが見えてきた。こうした舞名目などのない日本の舞の中に言葉の意味との対応ではなくて、音楽的な時間の進行を考慮すると、よりその舞踊にふさわしく動作の特徴を抽出できると思われる。

### 3. バリ島の舞踊の語彙と動作特性

—「レゴン・ラッサム」を事例として—

中村美奈子(お茶の水女子大学)

### (発表要旨)

従来のパフォーマンス研究では、舞踊の外側からの研究、すなわち舞踊を観る立場からの美的研究方法が主流であった。しかし、舞踊技法の研究には、その舞踊についての身体感覚が重要であり、研究者自身が実践的に舞踊を習得し、舞踊の習得過程を含めて舞踊の内側、すなわち表演者の側から研究する方法も有意義である。ここでは、バリ島の舞踊の基本ともいえるレゴン・ラッサム Legong Lasem をもとに、バリ島の舞踊の語彙認識を中心とする動作特性を分析する。

バリの舞踊は、民族音楽学の研究者らによる音楽を主体とした研究がほとんどであり、舞踊そのものについては、断片的にしか扱われていない。先行研究には、バリの女性による奉納舞踊ペンデット Pendet を例に音楽と舞踊のフレージングの関係を分析しているものがあるが、音楽と舞踊のリード関係についての分析を中心的にしたものである。本稿では、レゴン・ラッサムの舞踊を事例として、バリ島の舞踊における語彙について、ミクロな動作特性を Labanotation を用いて分析し、マクロな構造を型複合と型連結という二つの視点から分析することによって、バリ島の舞踊の基本構造を明らかにすることを試みたい。

本稿では、すでに「型」として、その文化においてあきらかな舞踊の動作単位を分析対象とし、むしろ、それらの連結、統語法のほうに焦点を当てた分析を行った。バリの舞踊についていえば、この「型」というレベルは、動作形態素(Morphokinemes)及びその上のモチーフに当たる単位であると考えられる。

本稿での作業仮説として、型及び型複合を語と捉え、型複合を分析することによって、動作形態素を明らかにできると考えた。また、型連結の分析によって動作統語

法の分析が可能と考えた。しかし、分析結果を見ると、語にあたる動作形態素としては、型、型複合及び型連結までを動作形態素と見ることが適当であろう。長い型連結の分析によって、舞踊統語法的一端に触れることはできたと思うが、この分析はまだ最初の一步に留まる。

#### 4. 舞踊と音楽の関係—インド古典舞踊、バラタナーティヤムの〈ヌリッタ〉作品の事例—

大谷紀美子(相愛大学)

(発表要旨)

インド古典舞踊の伝承者たちは、「最初に詩(歌詞)があり、歌手はそれを歌うことにより、踊り手は踊ることによって、観衆にその内容を伝える」のだと言う。しかし、物語のない〈ヌリッタ〉作品は「何」を伝えようとしているのか。

〈ヌリッタ〉作品の音楽は「歌」と歌手の歌う旋律を装飾する旋律楽器(主としてヴァイオリン)とリズムを刻むムリダンガムという太鼓で構成される。「歌」といっても、物語性がなく、歌詞は階名か辞書的な意味のないシラブルであり、反復が多い。装飾楽器は歌とつかず離れずの関係を保つ。ムリダンガムはこの楽器自身の演奏に関する細かなルールに基本的には従いながら、基本ルールとは別に動作に即した奏法を展開する。

リズムの側面では、ターラ(リズム周期)という大きな枠組みがある。その中で、ムリダンガムは細かいパターンを組み合わせ、踊りもアダヴ(基本動作の単位)を組み合わせ構成される。太鼓のリズムと踊りのリズムは常に

同調するのではない。古典音楽で歌と太鼓が異なる拍数のパターンを同時に展開し、ターラの幾つかの周期目で両者がぴったりと合うという妙味が語られるが、〈ヌリッタ〉作品の場合は、歌、太鼓、動作の三つの層でそれと同様なことが行われる。踊りに関しては幾つかのルールが存在する。一つの作品は5つないしはそれ以上の部分から構成される。各部分はアラディという終止形にあたる動作で終わる。これは南北インドの古典音楽の太鼓に見られるルールと同種のものである。

旋律的側面ではリズムほど顕著ではないが、曲想と動作の持つ特性との間にある種の関係がみられる。これらの点から、〈ヌリッタ〉作品は歌(装飾旋律を含む)とリズム楽器と踊り(動作)が同等の力関係で三重の層をなし、互いに競い合ったりせめぎ合ったりすることにより成立していると言えよう。

### ●シンポジウム

音楽を踊り、踊りを奏でる

—舞踊のテキスト研究の試み—

パネリスト 金光真理子・木村はるみ・中村美奈子

司会 大谷紀美子

(報告・大谷紀美子)

音楽と舞踊は非常に近い関係にありながら、それぞれの研究者たちが研究の成果を互いに評価あるいは批判、検討し合う機会はありません。音楽の研究者が舞踊音楽を研究する場合、テキストとしての舞踊を知らなければならず、また舞踊の研究者は音楽を無視する訳に

はいかないのは当然である。それにも拘わらず交流の場が少ないのは問題ではなからうか。音楽と舞踊の関係はさまざまであり、その舞踊が属する文化によって異なるであろう。どのような音楽に対してはどのような動作が適当であるか、またどのような動作に対してはどのような音楽が適当か。どのような音楽に対してはどのような動作は不適当であるか。ある文化で適切とみなされることが他の文化では不適切かもしれない。また、音楽が舞踊をリードするのか、あるいはその逆か。そして、それらは何故なのか。

舞踊研究者たちの多くがテキスト研究の方法論を模索しているのが現状である。テキスト研究においては動作の分節(フレーズ)は重要な課題の一つである。動作の分節を考えるにあたっては音楽の分節を平行して考察すると分かり易い場合がある。ラウネッダス、パラタナーティアム、レゴン・ラッサムそして巫女舞はそれぞれ動作の単位「型」の連結で構成された舞踊である。「型」の大きさや存在するレベルはそれぞれ異なるが、「型」は比較的容易に抽出できる単位として存在する。そして動作の分節を明らかにすることにより音楽との相関関係が見えてくる。

各研究者は動作の分析にあたってラバン記譜法で動作の記譜を行っている。「記譜すること」は単に記録としての役割のみではなく、「動作分析」でもある。舞踊研究者の間には動作の記譜法はなかなか浸透しないが、日常的に「音を譜」に表す音楽研究者にとっては動作の記譜もさほど抵抗がないように思われる。

本シンポジウムは、舞踊のテキスト研究を中心とするが、その中で動作の分節・型の連結構造、音楽との相関関係、動作分析や記録に必要な記譜の問題が検討課題である。

(コメント・増野亜子)

舞踊と音楽の相互関係を扱った今回のシンポジウムは、音楽研究者と舞踊研究者の双方にとって意義ある企画であった。四つの発表は対象とする地域やジャンルだけでなく、研究者としての関心や背景、音楽と舞踊への比重の置き方も異なり、そのこと自体が舞踊研究の多様な可能性を示していた。さらにそれらの多様な視点を縦断するように、舞踊及び音楽のテキスト的な側面に比重を置き、パフォーマンスの構造を統語法的に分析する視点が共有されていた点が興味深かった。

特に印象的だったのは音楽を通して舞踊を、舞踊を通して音楽を理解しようとする道筋が、各領域でそれぞれに模索されていることであった。金光氏は踊り手と演奏者の間に生じる「対話」に焦点を当て、踊り手の認識が音楽構造を理解する手がかりになることを示し、大谷氏はさらに一歩進んで、インド古典音楽の構成原理と舞踊のそれが共通であり、両者が重ねられて全体として重層的な構造をなしているとした。演奏家と踊り手の相互作用を重視するこれらの事例では、両者間には構造意識の共有を前提とした、意図的なずれや駆け引きがうまれる。即興や創作の要素もあり、音楽と舞踊の構造の問題はパフォーマンスの可変性、ヴァリエーションの問題へとつながっている。

一方、対照的に金刀比羅宮の舞曲とバリの「レゴン・ラッサム」の事例では音楽と舞踊のテキスト的側面が相対的に固定され、両者の結びつきが一つのかたちとして伝承されているようだ。木村氏は舞をめぐる時間認識のあり方を深く理解するための糸口を音楽分析に求め、中村氏はバリ舞踊の語彙を細かく分解した上で、再度その結合・連結として舞踊構造を捉えなおす統語的なアプローチを示した。私見だが、舞踊や音楽の分析

では最小単位の抽出、分節に際して最も微妙で困難な問題が立ち上がるように思う。また質疑の際に木村氏は、舞人が動作の始点を琴の音に求めている可能性を示唆したが、踊り手が音楽を、演奏家が舞踊をどのように認識しているのか、というエミク的なアプローチと、エティックなテキスト分析の融合はパフォーマンス分析に共有の課題ではないだろうか。

欲を言えば舞踊研究者にとって互いの方法論がどのように評価できるのか、もう少しつつこんだ批判や議論の応酬を聞きたかった。しかし質疑の際に提示された補足的なコメント(ラバノーテーション活用の現状と限界や舞踊の教育・指導のプロセス等)も興味深く、舞踊研究の蓄積が音楽・舞踊の双方の研究にとって貴重な共有財産であることを再認識した有意義な会であった。

#### ◆東日本支部第21回定例研究会

(国立歴史民俗博物館との共催)

時 2005年9月3日(土)午後1時～4時

所 国立歴史民俗博物館 大会議室

#### ●研究発表

兼常清佐考一学位取得を中心に―

蒲生美津子(沖縄県立芸術大学)

(発表要旨)

明治大正期の日本音楽研究の先駆けとなった兼常

清佐の学位申請、学位取得時期、学位論文の体裁について報告し、兼常が学位申請をした動機と研究活動を読み取ることにより、兼常の人物像について、学位取得の側面から考察した。主な使用資料は『京都帝国大学一覽』、同大文書館保管「学位授与関係書類」、萩博物館蔵兼常家関係資料、上野学園日本音楽資料室保管兼常清佐遺品のなかの書簡類である。

論文題は「日本ノ音楽ニ就テノ一觀察」、論文提出先は京都帝国大学である。大正9年5月3日の学位申請を受け、学位授与年月日は、兼常が欧州留学を終えて帰国してから約一年半後の大正14年12月15日であった。兼常は明治43年9月に大学院に入学。当初専攻はギリシャ思想史であったが、大正2年10月からはテーマを「東洋ノ音楽及言語ノ歴史トソノ物理上心理上ノ構造」に変更している。このテーマは大正14年まで「大学院学生」欄に掲載されており、兼常は大学院を退学せずに在学のまま、相応の規程に則って学位を取得したことが分かる。

これより先兼常は、大正2年から徐々に、民謡採集、邦楽調査掛への参加など東京で活動を開始していた。なぜ大正9年に30歳を超える年齢で学位申請を行なったか。兼常の頭にはふたつの計画があったと推察する。ひとつには学位、もうひとつは外国留学である。彼は周辺の教授陣の研究業績と洋行経験を肌で感じるとともに、上京によって洋楽への嗜好が高まった。順序として、まずこれまでの研究生活を精算し、その後に留学、と考えるとらしい。大正8年10月の父の死去を契機に学位申請の意思を固め、父の死去後一気に論文を書いた、と推測する。ただし一気にどこで書いたかの特定は、彼が頻繁に関西、東京を往復しており難しい。いずれにしろ、

論文はまさに彼の日本音楽研究の集大成であった。

論文は、京都大学附属図書館に保管される。礫川堂製 600 字詰め原稿用紙に万年筆書きである。全部で7冊から成り、①研究の目論見と目次、②日本の民謡の構造に就て、③民謡以外の音楽に於ける旋律の変遷に就て、④日本の音楽の理論に就て、⑤日本の音楽の楽譜の変遷に就ての5冊を本論とし、③に『日本の音楽』、④に「雅楽及声明図書展覽目録」の2冊を付録とする。本論は原稿用紙約 250 枚の分量を数える。複写は、故人の場合、遺族の承諾が必要だが現在のところ遺族が不明なので、2年後に可能となる。

(コメント・遠藤 徹)

兼常清佐は、田辺尚雄と同時代に活躍した学者であり、数々の独創的な研究を切り開いたにもかかわらず、その特異な言説のためか、必ずしも正当な評価を得ていないことを日頃残念に考える一人として、没後五十年に及ぼうとする今日、このような地道な研究がはじまっていることは意義深く感じられた。蒲生氏の発表は、兼常の学位論文取得の経緯を京都大学の文書から詳しく考証したものであり、逸話をおりまぜながら兼常の人となりの一側面が分かりやすく提示された。しかし、肝心の論文の内容については、未だ複写ができないとこのことで、目次が示されたのみで踏み込んだ考察はなかった。その点に期待していた者としては、物足りなさが残った。提示された目録を一瞥しただけでも、その後に公刊された論著にどのようにつながるかなど多くの興味がわくものであった。今後の進展を期待している。発表後は、鈴木鼓村との関係など質疑応答が活発になされた。

## ●歴博企画展示

### 「紀州徳川家伝来の楽器」見学

基調講演

楽器史から見た紀州徳川家伝来楽器コレクション

小島美子(国立歴史民俗博物館)

(発表要旨)

このコレクションは紀州藩第 10 代藩主徳川治宝<sup>はるとみ</sup>が主に集めたものだが、雅楽器を中心として総計 156 点に及ぶもので、内容的に価値が高く、一括して国宝または重要文化財に指定されるべきものである。

内容は笙、箏、龍笛、能管、高麗笛、神楽笛、笏拍子、一節切、洞簫、明笛、楽琵琶、楽箏、和琴、七絃琴、瑟、一絃琴、楽太鼓、鞆鼓、鉦鼓、錦鼓、壺鼓の他、調子笛各種や楽器の付属品、そして多数の楽書、楽譜類がある。とくに「含和」の銘をもつ洞簫は中国製で AD198 年製作の日本に現存する最古の笛。また琵琶は銘器を多数含んでいる。

1992 年に私は当時歴博におられた神庭信幸さんの協力を得て、その龍笛と能管の内部構造を透過 X 線で調べた。その結果龍笛 25 管のうち 14 管に、吹口と指孔との間に修理のあとが見られた。それはちょうど能管の喉に当たる部分で、能管の構造にきわめて近いものも見られた。その結果、龍笛の修理の過程で喉の効果を知った笛の製作者が能管を作ったのではないかというこれまでの推測を一步進めることができたとは考えていた。

ところが今回歴博が出版した「紀州徳川家伝来楽器

コレクション」という報告書には、楽器の付属文書が全部翻刻されており、それにより、「男女川」という能管は、龍笛から改造されたことがわかった。森田休音という能の笛方森田流の二世庄兵衛光時(1616-86)が大和のある神社で見つけた龍笛を宜竹法橋という人に命じて能管に改造させたという書付があったのである。これは江戸初期の話であり、すでに能管は存在していたが、少なくともこの実例は龍笛から能管へという説を補強するものになると思われる。私は今回ただ笛類について調査しただけであるが、今後他の楽器や楽書、楽譜についても調査を進めれば、楽器史、音楽史にとって重要な資料がいろいろあるであろうと考えられる。

(報告・薦田治子)

今回の東日本支部例会は、国立歴史民俗博物館と共催で行われた。同博物館の企画展示「紀州徳川家伝来の楽器」の見学が例会の行事に組み込まれたからである。

見学に先立って、小島美子氏による基調講演「楽器史から見た紀州徳川家伝来楽器コレクション」が行われた。講演は、同コレクションおよび、今回の企画展示の展示品の概要を説明する前半と、このコレクションに含まれる竜笛と能管の調査結果を、ひとつの根拠として展開された、氏の日本の笛の変遷史に関する仮説を述べる後半からなっていた。小島氏は、このコレクションを博物館が収納した際に歴博に勤務しておられ、当時の回想も交え、このコレクションのすばらしさと学術的な意味とを分かりやすく説かれた。

その後、本企画展の担当をされた日高薫氏のご案内で、展示を見学させていただいた。展示は三つのコンセ

プトから構成されている。「Ⅰ 徳川治宝の楽器収集」のコーナーでは、笙について記した「真葛記」が楽器とともに紹介され、治宝の楽器収集にかける思いが伝わってくる。また同時代に彦根藩主井伊直亮も競い合うように楽器収集を行っており、両者の収集に同じ楽器商が介在していたことも明らかにされた。日本の二大雅楽器コレクションが、ほぼ同時代に形成されたことはたいへん興味深い。「Ⅱ 雅の調べ」では、コレクションの本体をなす、雅楽の楽器が種類別に紹介される。質・量ともに圧巻である。「Ⅲ 楽器の装い」では、美術工芸品としての楽器や収納される袋や箱が展示される。

なお、紀州徳川家伝来の楽器コレクションには、美しい写真と付属文書の翻刻を収めた大部の図録が完成している。また、図録中の情報はインターネットですべて公開されている。このような基礎的な作業は学会に寄与するところ大である。

<http://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/searchrd.pl>

\*\*\*\*\*

発行：(社)東洋音楽学会東日本支部

編集：遠藤 徹、小塩さとみ、加藤富美子、

大木聡美、黒川真理恵

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 音楽・演劇講座 加藤(富)研究室気付

Tel/Fax:042-329-7576

E-mail:katomi@kf6.so-net.ne.jp(加藤)

\*\*\*\*\*